

私が駅から街へ出るときは、必ずJRの制服・制帽姿で出掛ける。街の人に気軽に声を掛けていただき、駅やJRに対するご要望やご期待を拝聴して、仕事のヒントにしていきたいからだ。

国鉄時代は当時のお家事情の悪さから、制服を着たまま街で食事をする、ことさえはばかれた、と先輩から聞いたことがある。

でも、私は駅長としての責任と、市民としての責任を背負っている。会社への苦言やのしりも受けるかもしれないが、それは謙虚に受けるべきだし、一方で、鉄道の安

全・安心を守りながらも、期待される役割を自覚し、また自分の持ち味も発揮しながら地域の活性化に貢献することが自分の責任だ。そう考え、制服姿で街に入っていくことにした。

もちろん、私が制服で堂々と街を歩けるのも、当駅の社員が鉄道の日々の安全を守り、お客さまから一定の安心感と信頼感を得ていることが前提である。駅社員には本当に感謝している。松江駅の皆さん、いつもありがとう。あと、細かいこと

街に繰り出し要望拝聴



駅から出掛けるときはいつも制服。仕事のヒントに目を凝らす—松江朝日町、JR松江駅

までいつも口やかましくすみません(笑)。

私もそれを肝に銘じているからこそ、朝は改札口に立ち、お客さまや駅社員との肌感覚での付き合いを大事にしている。特に、構内放送と深夜の雪かきは私の十八番だ。

いざ街へ繰り出してみると、いろいろな方から

お声掛けいただき、ご要望もいただいた。実現して一番喜んでいただけただけなのは、駅構内のトイレの改装と、「縁結びの広場」のステーションをつくって駅ににぎわいを生み出してきたことだ。

発案したり、工事の細部にこだわったりしたのは確かに私だが、実現できたのは、松江市長をはじめ市民の皆さんと、理解ある会社の上司や同僚

たちのおかげだ。打ち出の小づちなどどこにもない中で、「できそうにない」ことを「できる」ように変えるには、知恵が必要である。「三人寄れば」と言うが、やはりその知恵出しは、人と出会い、語り合い、協力しあうことから始まる。やったことに必ず賛否があるのは承知の上だ。最適解を探りつつ、とにかくやってみる。一方で、言葉によって粘り強く関係者の納得を得ていく。それもリーダーの役目だろう。

明るく開かれた駅を起点として、元気な街をつくりたい。そう思い、制服のまま、街のいろいろな人と会って話し、また、たまにはおチャラけた姿もさらすことにした。

(JR松江駅長・内山興)

第2、4月曜掲載

制服で勝負

